

木村 久邇典（きむら くにのり）

大正12年 札幌市生れ。中央大学法卒。
TV脚本 「虚空遍歴」「女流作家の生活」
「太宰治の津軽」「消える“青べか”の街浦安」など。

著書 「人間 山本周五郎」「素顔の山本周五郎」「山本周五郎裸記」「続山本周五郎裸記」など。

朝日新聞東京本社校閲部員。日本文藝家協会会員。

住所 鎌倉市鎌倉山1681。

山本周五郎アルバム

定価 九八〇円

昭和四十八年三月二十日 初版発行

編者 木村 久邇典

発行者 増田 義彦

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)四三一一

振替 東京三二六番 一〇四

関西支局 大阪市北区真砂町五三

TEL 〇六(三六三)一七〇六

印刷 東京研文社 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

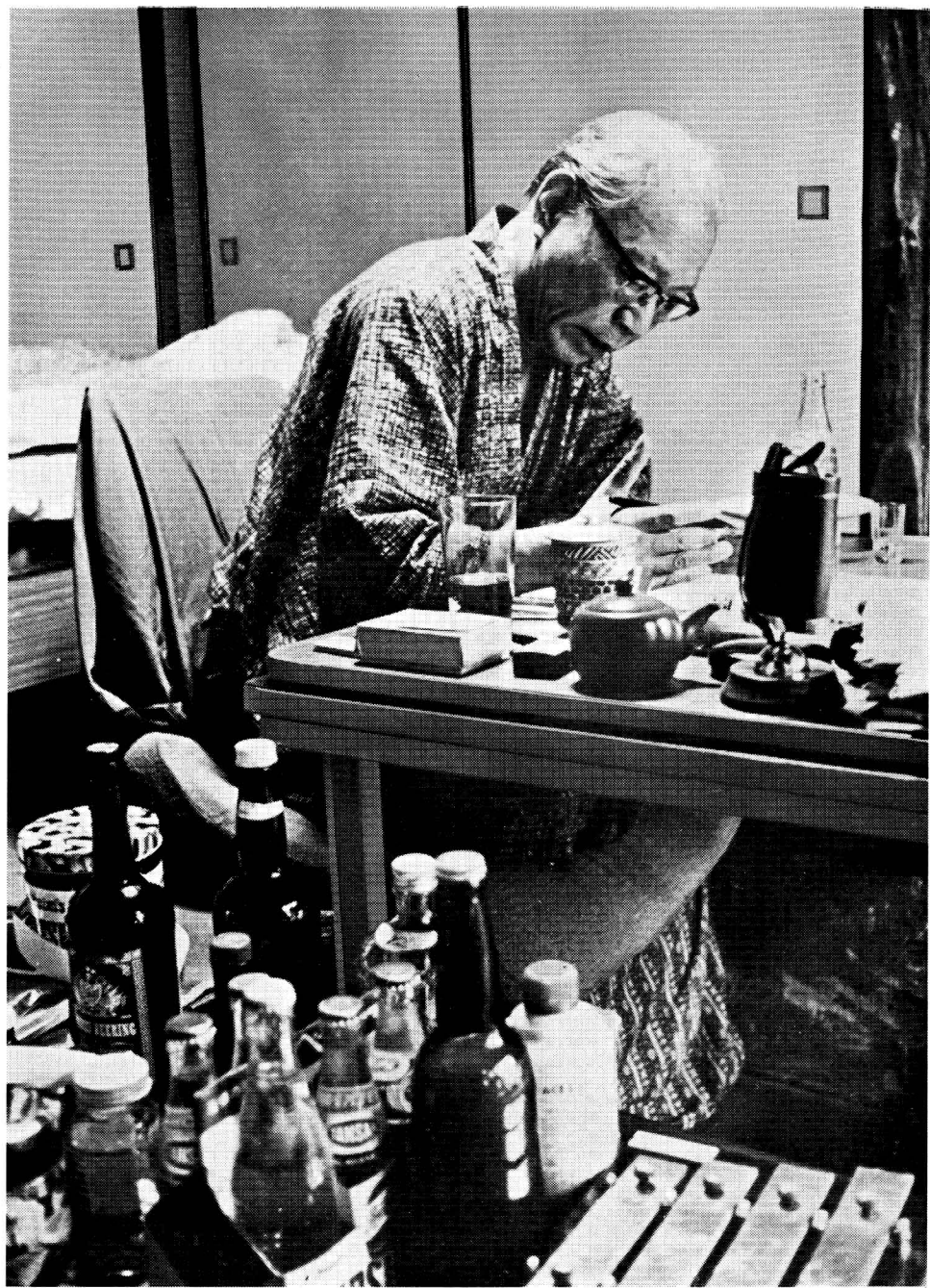
0095-362281-3214

© K. Kimura 1973

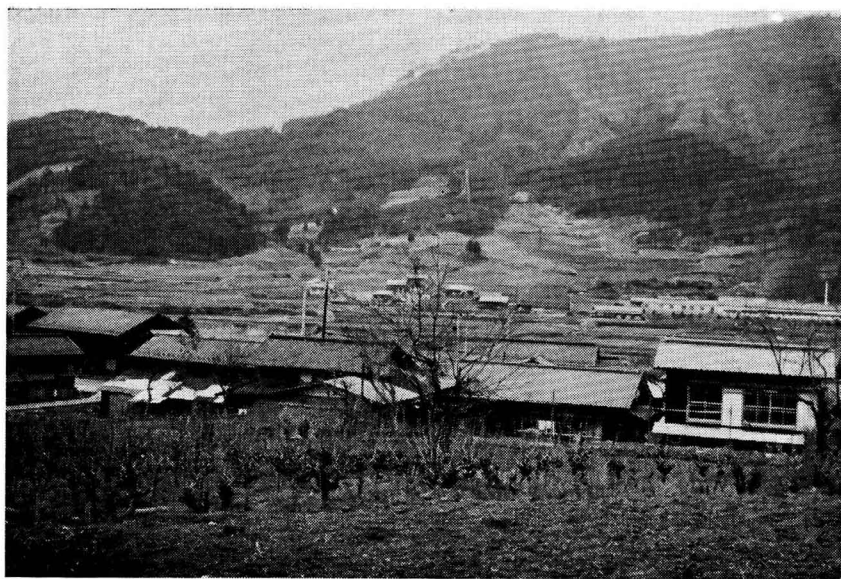
山本周五郎アルバム

木村久邇典
編

実業之日本社



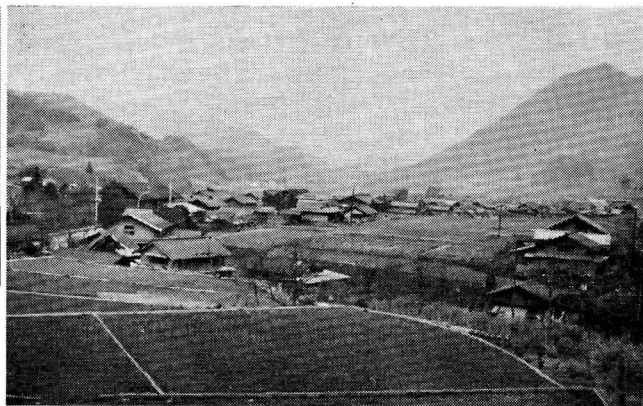
昭和40年夏，間門園の仕事場で



右手の柿の木のあたりに生家があった



あそび仲間だった
奥脇賢吾氏（前・
初狩郵便局長）

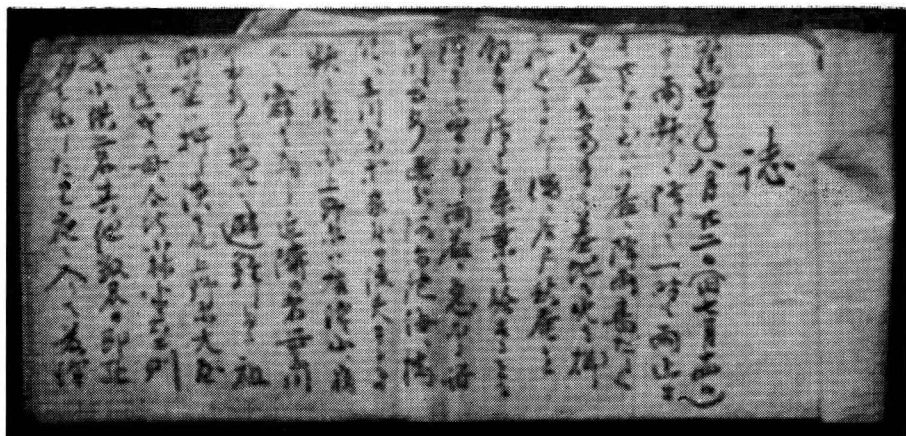


初狩風景

山本周五郎は山梨県北都留
郡初狩村八十二番戸（現大月
市下初狩二二一番地）奥脇賢
造方の長屋で、明治三十六年
六月二十二日午後十一時、兩
仲買商清水逸太郎の長男とし
て生れた。本名は清水三十六
（さとむ）。
明治四十年八月二十五日早

朝、大雨続きの寒場沢から押
寄せた土砂で、みどう屋敷と
よばれた奥脇家の母家も、数
戸の長屋も倒壊し、一瞬にし
て祖父母、叔父桑次郎、叔母
せきなど四人の肉親を失なっ
た。母とくは三十六を伴い、
すでに東京にあった逸太郎の
もとに移住する。

現在、桑畑になっている生
家あとは、中央本線初狩駅か
ら、大月寄り数百メートルの
近距離にあり、車窓からも眺
めることができる。畑のなか



奥脇賢造氏所有の明治40年の山津波の記録。叔母せきが、数日後、雇い入れられる予定だった記述が見える。



『山彦乙女』の舞台になった寒場沢（遠景）



みどう屋敷あと（中央の白い建物が上水道の水源池）

に立つ二本の柿ノ木の、大きな木のほうに長屋があったという。古くから水堂（みどう）屋敷とも呼ばれたのは、この敷地の一角に、四季涸れたことのない湧清水があったためともいわれ、いまでも私設上水道の水源地になっている。



若尾の本籍地

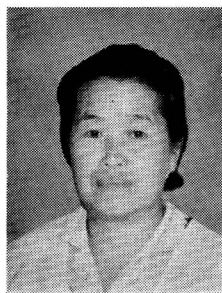
山本周五郎の本籍地は山梨
県北巨摩郡大草村若尾（現韮
崎市大草町若尾区八百二十一
番地）である。このあたり、
巨摩の連山の西麓が、釜無川
へなだれ込む一帯は、武田氏
発祥の地と伝えられ、いまだ
に天正の昔を伝える地名が少
なくない。山本は生前、本籍
地を出生地と語っていた。祖
先は武田家の部将清水政秀と
伝承され、主家滅亡ののち、
若尾に帰農した豪族だったと
いう。昭和十五年の作品『春
いくたび』に、△香苗の家は
信之助の清水家に次ぐ旧家で
あった。厚さ三尺もある土塀
が、屋敷まわりの三方を取巻
いていた。その中には母屋だ
の隠居所だの、厩だの下男た
ちの小屋だのが建っていた
し、広い柿畑さえ取入れてあ
って、その柿畑のうしろはそ



清水家の菩提寺・正福寺



根岸家裏庭の五輪塔



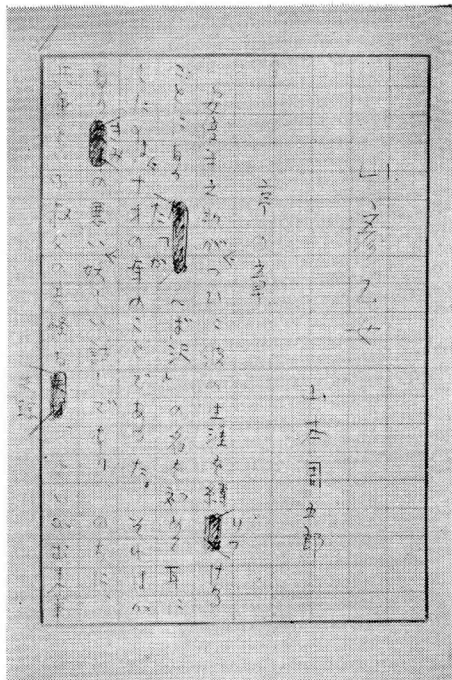
双葉町・滝沢の向山家に嫁した義妹末子さん

のまま段登りに、深い松林で山へと続いていた。……と書いているのは、本籍地の遠い記憶を表現したものである。また、幼時の思い出を、山本はつぎのように記している。《五つの年に袴着の式というのをやらされ、七つの年には切腹の作法をやらされたのです。小さな白装束に袴をつけて、三宝の上にたたんだ紙を敷き、その上に短刀と扇子がのせてあり、扇子のほうで切腹の型を実演した》（『酒も食べ物も』）

事実、明治十二年現在で清水家の宅地は、約三百五十坪が登録されていたのだが、同二十二年その大半を人手にわたして初狩へ移住したのである。最後に残った六十坪が売られたのは三十七年十二月三十一日で、清水家の家運の



韭崎市七里岩台上の文学碑



原稿『山彦乙女』



甘利山遠望

衰退があらわただしかったことを物語っている。

いま、本籍地あとは桑畑と三軒の農家がたち、真中に細い道路が通って敷地を二分している。そのなかの一軒、根岸喜代三氏宅の裏庭に、約五百年前と推定される五輪塔四基があり、近年、この付近に大隅守政秀が埋めた武田家の軍用金三十箱が、あるのではないかという話題が流布されて、人々の関心を集めた。

山本周五郎は、終生きびしく故郷の甲州を拒絶しつつけた。だが戦後初めての本格的な新聞小説『山彦乙女』(昭和二十六年、朝日新聞)では、初狩と北巨摩の山河を集合させた舞台に、独自のロマンを展開している。作者の屈折した郷土愛の現れだったのかもしれない。



『山彦乙女』の一舞台
武田八幡



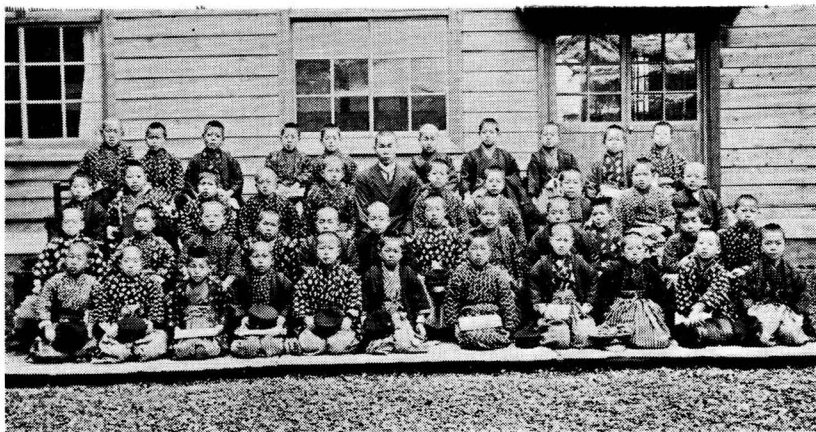
新府城址の藤武神社



御堂部落の武田氏祈願所・願成寺

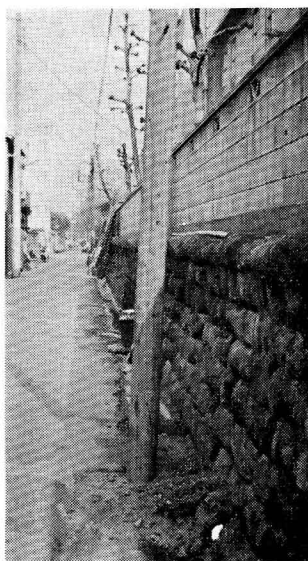
昭和四十五年六月二十二日、韭崎市文化協会は、郷土が生んだ不屈の作家山本周五郎を記念する文学碑を建立した。場所は国鉄韭崎駅近くの七里岩の台上で、白亜の平和観音立像と向いあい、釜無川をこえて若尾の里や、甘利山、鳳凰三山をはじめ、甲斐の山々を眺望する景勝の地にある。

碑文は『山彦乙女』の中から選ばれた。今はじめ韭崎という町に宿をとって春の来るまで付近のようすを見てまわった。そこは釜無川の東がわで川上のほうには、むかし武田勝頼の拠った新府城の址がある。川に面した断崖の上で、石垣も塁も乱雑たる廢墟だったが、今でも土を掘れば刀の折れや、焼けた杓などが出るといふことである》



西前小学校の学級記念写真(四年生)

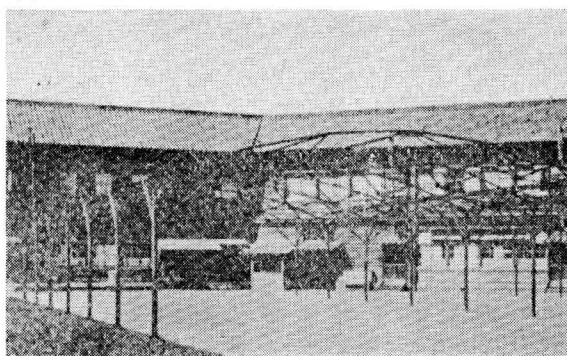
3列目	左から2人目	山本周五郎
2列目	左から3人目	村田汎愛氏
"	" 5人目	桃井達雄氏
"	" 7人目	町野敬一郎氏
最前列	左から2人目	青江一郎氏
担任	水野先生	



西前小学校の昔のままの石垣



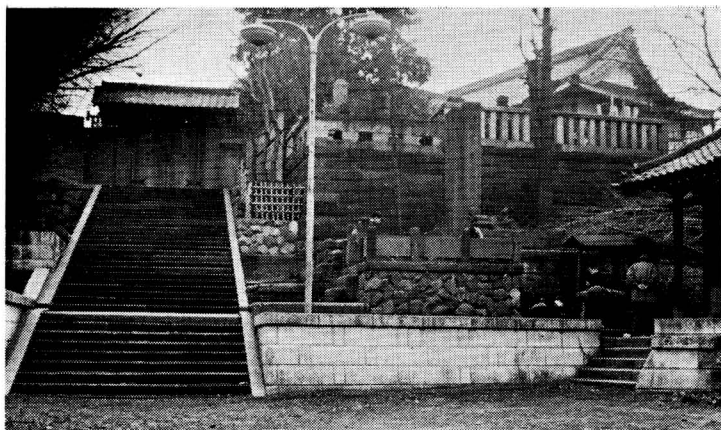
和田奈々吉校長



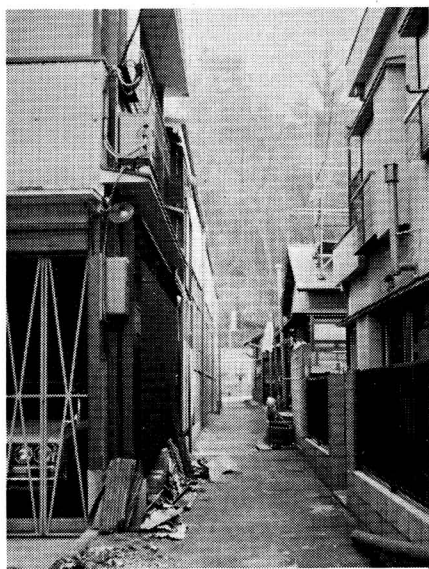
創立当時の西前小学校

明治四十三年、六歳のとき、東京府北豊島郡王子町大字豊島二六二五番地から横浜西区の願成寺下に移転、西戸部小学校に転校ののち、学区の編成替えて四十四年、西前小学校二年に転入した。父はここで金融業、料理屋、三業組合書記などを転々し、久保町内でも数回引越している。最後の家は、いまの市バス水道道停留所まえの神奈川日産ビルの玄関あたりにあった。

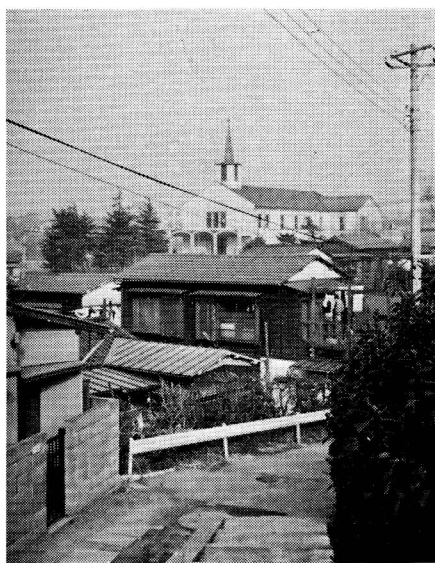
小学校三年のとき、学級担任水野実先生に「君は小説家になれ」といわれ、はつきり作家たらんと立志する。「終生の恩人の第一者」だと書いたほど、衝撃的な啓示であった。綴方教育に熱心だった校長の和田奈々吉先生も、夙に山本の文才を認め、学校新聞の責任者を命じた。公六年生



母とくを葬った願成寺



久保町付近



西戸部台の古い教会

小学校時代の親友に村田汎愛氏（現関東学院高校教頭）、青江一郎氏、町野敬一郎氏、桃井達雄氏がある。へ——戦後に横浜へ住むとすぐ、この学校を訪ねたが、古い先生がたや旧友の消息も知れず、ただ昔のままのこの石垣を見て、なつかしいというより深いさびしさのようなものを感じ

ない。は学業成績簿も保存されていない。

のとき回覧雑誌を作った。自分で表紙を書き、扉絵に詩（？）を書き、級友の作文や図画を集めたもので、たしか五、六冊はたまったと思う。卒業のとき校長先生から寄付せよといわれ、よろこんで学校へ残したが、大正十二年の震災で、校舎もろとも灰になったそうである（昔のままの石垣）。したがって同校には



西前銀座

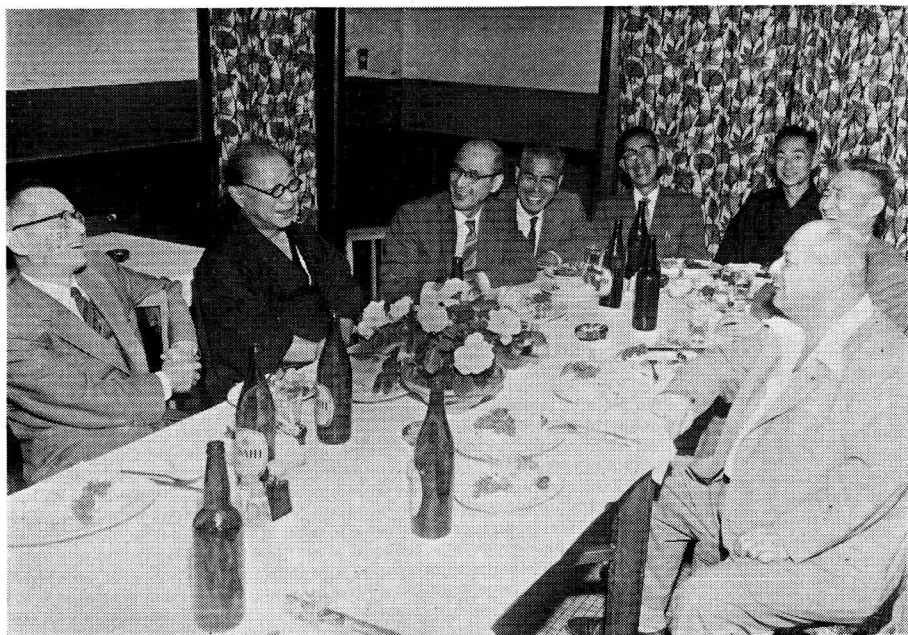


西区水道道付近（中央が神奈川日産ビル）

じた。いまでも月に一度ぐら
いはこの石垣を見にゆくので
あるㄱ（「昔のままの石垣」
と書いたほど、西前小学校
は、山本にとって思い出のふ
かい学び舎であった。

少年時代の山本は、クリス
チャンだった父の感化もあっ
てか、近くの日曜学校に通っ
て讃美歌を歌ったりした。願
成寺（ここに母とくが葬られ
た）から西戸部台へ坂道を上
ってゆくと、左側に古い教会
の尖塔がみえてくる。明治の
開港場に特有のハイカラだっ
た雲囲いが、まだこのあたり
には漂っているようだ。

山本少年は、決して級友を
自宅に連れてゆかなかった。
生家の不如意を友人に見せる
のをきらったのだらうと、こ
れは村田汎愛氏の回想であ
る。



西前小学校クラス会（昭和38年夏，横浜・本町のレストラン・
ニュー不二で，左端が村田汎愛氏）



担任の水野先生、山本は
生涯第一の恩人と称した



山本質店主・周五郎氏（洒落斎）



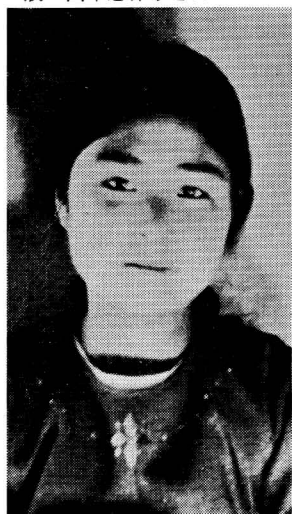
山本津多夫人

大正五年三月、西前小学校を卒業した三十六少年は、東京・木挽町の山本周五郎商店（質店）に徒弟として住込んだ。家庭の経済事情で進学希望はかなえられなかったらしい。父逸太郎と性格的にソリが合わなかったこともあって、山本・清水両家に入りにしていただひとの世話で、みずから進んで東京へ出たという。両家にはうすい縁戚関係もなかった。

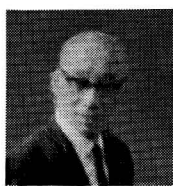
父の逸太郎を郷里では「きれい型で少し変り者といった感じ」と称するムキもあるが、「小心なほど几張面で口やかまし屋」だったと、実弟の潔氏は語っており、また、山本自身は次のように書く。公私のおやじは貧乏なくせに眼玉の大きな、親類じゅうから煙たがられている、酒の飲めない、吝嗇な、やかまし屋でありました（『酒も食べ物も』）。きびし過ぎる父親の躰けぶりに、少年が反発したとみた方がよさそうである。

母のとくは、しっかりした地味な人柄で、「たべものを作るのがうまかった」（『語る事なし』）。大正十五年十月、とく

初恋の人と目した
故・山本志津子さん



山本せんさん（店主後妻）
と三女敬子さん



実弟の故・潔氏

の死んだ通夜の席で、近所のおかみたちから、母が父にないしよで彼女たちに小銭や古衣を進呈していたことを聞き、後日、『日本婦道記』シリーズの第一作「松の花」にバリエーションしたのが初期の代表作になった。このアルバムのために、逸太郎ととくの肖像を捜し求めたが、ついに入手することができなかった。

木挽町の山本周五郎店主と津多夫人は、向学心にもえる三十六少年の面倒を親身にみた。肉親以上に真実の父親と母親とを、多感な少年は感じ取り、津多夫人に関しては公私はふたりの母親をもった。ひとりは育ての母である。生母は田舎生れであり、育ての母は東京の下町に生れ下町育ちであった。語ることなしに書き、周五郎店主については、昭和三十六年三月二日付の、店主の末娘敬子さんに宛てた書簡で、彼女の質問につきのように答えている（『洒落斎』という雅号はお父さま（私はいまでも本当の父と思っています）の本当の号だったので）。洒落斎翁みずからも、三十六少年と競っ